# 第１章　発声の基礎

## 1．発声とは？～声の種類～

　みなさんは普段、どんな声で喋っていますか？驚いたときに出る声やお母さんが電話に出るときに出す声、カラオケで歌うとき…実は声の出し方はいろいろあります。クライネスでは、声の種類や質を指して「発声」ということが多いです。合唱では色んな発声ができるととても楽しいです。まずは、周りのみんなと声が合うような「自然な声」が出せるような発声にチャレンジしましょう！

　「自然な声」とは「妙な力が入っていない声」とも言えます。自然な声を出すためには**美しい姿勢と腹式呼吸を身につけること**が大切です。声を張り上げるのではなく、自分自身の持っている最も魅力的な声を響かせましょう。

### おまけ１：地声と裏声

　地声、裏声とはクラシック分野の声楽用語で声区（せいく）（レジスター）と呼ばれる分類法に属します。

　低い音から次第に高いほうに発声していくと、ある音の高さでそれまでの出し方では声が出せなくなります。その音より高い声を出すには声の出し方を変えなければなりません。この出し方の変わる部分を境にして低い側を地声、高い側を裏声と言います。

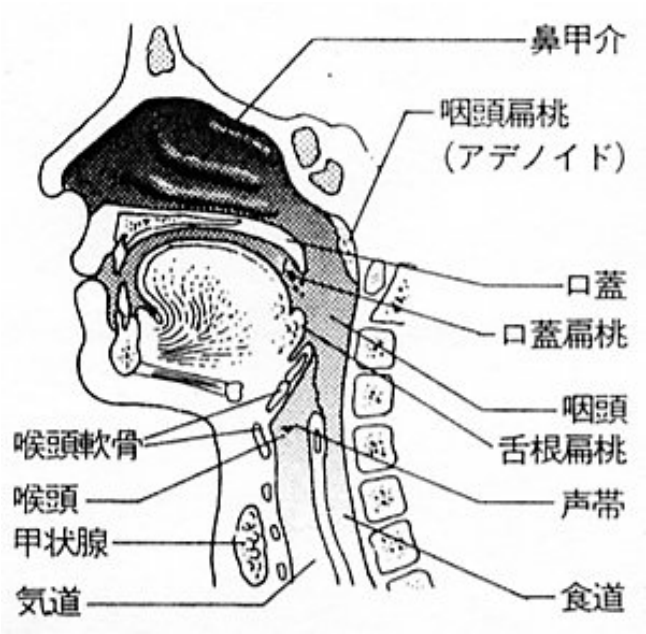
　地声と裏声の変化にともなって音色も変化します。この音色の変化を利用すると、聴く人に与える印象を変えることができます。

　また、女性の皆さんは裏声が発声を行う上でのスタンダードとなります。そこで、カラオケなどのように地声でがんばらずに、裏声での発声を身につけましょう。

| | 声区 | 聞く人に与える印象 |
|---|---|---|
| 地声 | 低い声 | 力強く重たい感じ |
| 裏声 | 高い声 | 軽く澄んでいる感じ |

♪クラシックでは地声から裏声への転換を気づかれないようスムーズに移行することが理想とされています

## おまけ２：通る声




日常生活の中で「声がよく通る」とか「通らない」という表現を聞いたことはありませんか？歌声においても同じように「通る声、通らない声」が存在します。歌声における「通る声」とは、無理せず良い発声で歌えている声のことです。「通る声」を出すためには喉頭(ノドボトケ)を通常の位置より少し下げます。すると喉頭と咽頭との音響的なつながり方が変わり、喉頭のところに別の共鳴する空間ができます。

また、「通る声」は自分自身にはあまり大きく聞こえず、逆に「通らない声」の方が上手に聞こえることがあります。なので、ぜひ先輩にみてもらって「通る声」を出しているときの感覚をつかみましょう。

### ※ファルセットってなぁに(・ω・)?

ファルセット(Falsetto)とはイタリア語で『不適切な声』『偽りの声』と言う意味です。元来は成人男性が女声の使う高音の声域まで拡大・補充するために使われた唱法でした。近年ではファルセットの概念がかなり拡大解釈されてきたため正確な定義をすることはできません。声の出し方から言えば裏声にほぼ近いと考えられますが、ファルセットは声帯の中にある筋肉がほとんど働きません。そのため、裏声を「芯のある裏声」と「芯のない裏声」に分けたときに後者をファルセットと呼びます。

# ２．体から余計な力を抜いて、良い姿勢で立ってみよう！

声を出す際にはのどだけではなく、全身を使う必要があります。スポーツ選手もストレッチや体操を入念に行ってから競技の練習に入りますよね？それと同じで合唱をする際も、まずは自分の体を歌うことができる状態にするための準備を行いましょう。

## ２―１．体をほぐそう　～歌う体を作る～

まずはストレッチをしましょう。柔軟に筋肉を使えるように、全身の筋肉をほぐしましょう。歌は特に上半身の筋肉を使います。

♪ チェック

- □ フェイストレーニング（ほっぺたなどを自分でマッサージする。いろんな表情をしてみる。）
- □ 肩もみ
- □ 各部の筋肉をよくのばす。２人組でやるのも効果があります。

さらに、体全体をリラックスし、脱力して歌うための準備をします。

♪ チェック

- □ 上半身：ジャンプする（飛んでいる最中が脱力できている状態。）肩を上げ下げする。
- □ 背中：まず前屈姿勢になって上半身の余計な力を抜く。その状態から背骨を組みたてるように少しずつ上半身をあげていく。
- □ 首：頭を前後左右に倒して首筋をのばそう。また、頭を左右に回す。←この際絶対早く回さない！ボールを転がすようにゆっくりと。
- □ あご：あごを左右に素早く動かす。限界まであごを開けてから力を抜く。
- □ 全身：力を抜いて立ちしばらくそのまま。指先や足先が暖かくなるのを感じる。

◆良い例

〇脱力が出来ている。上級生に腕を揺らしてもらったときにぶらぶらする。

◇悪い例

×上半身に力が入り、かちかちになっている。

×譜面を持ったとき、手に余分な力が入る。

## ２―２．姿勢　～良い発声の基本を作る～

まずは「**良い姿勢の３点セット**」を覚えましょう。

良い姿勢の３点セット

①　おなかを引き締める
②　胸を高くする
③　あごをちょっとひく

**～良い姿勢の３点は必ず覚えましょう！～**

特に順番が大切です。足は肩幅くらいに開いて、おなかを引き締めてみましょう。おなかを引き締めたときに前傾になるのを直すため、胸を高くしますましょう。また口の奥もしっかり開けられるように、あごも引きましょう。そうすると、体がまっすぐなりますね！

♪ チェック

☐ 良い姿勢の３点はちゃんとできているか？
☐ 確認のために壁に足と背中と頭をつけてみる。それが出来たらそのまま前に２．３歩でて、その姿勢をキープできるようにする。
☐ 肩幅くらい足を開いて立っているか？
☐ 以下のようになっていないか？

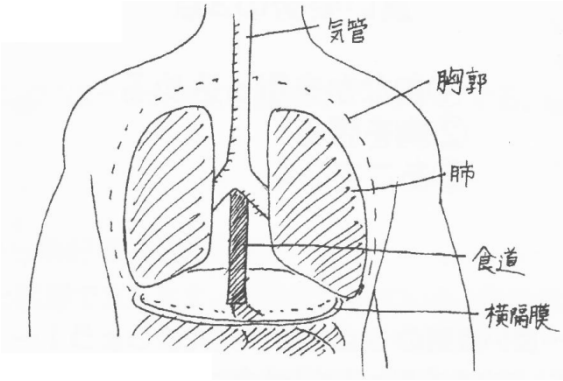
×上半身が反っている、または猫背になっている。
　→壁に背中をつけてチェック！まっすぐな体になっているかな？
×あごを引いた際にのどに力が入っている。
　→あごまわりをちょっと動かしたりしてリラックスしよう！
×前から誰かに押されるとすぐ倒れる。
　→体がカチコチだと歌うのも大変！軽く動かして肩や膝も脱力しよう！

**～歌っている最中に良い姿勢をチェックしましょう！**
**脱力、良い姿勢は良い発声の基本です！～**

# ３．実際に息を流してみよう！

## ３―１．胸式呼吸と複式呼吸

呼吸には**胸式呼吸**と**腹式呼吸**があります。普段の生活中ではほとんどが胸式呼吸になっており、寝ているときは腹式呼吸になっています。胸式呼吸では、「肋骨、胸骨、鎖骨」などの胸を広げることを強く意識します。それに対して、腹式呼吸では、「**横隔膜**」が重要になります。横隔膜の位置は下の図で確認してください。

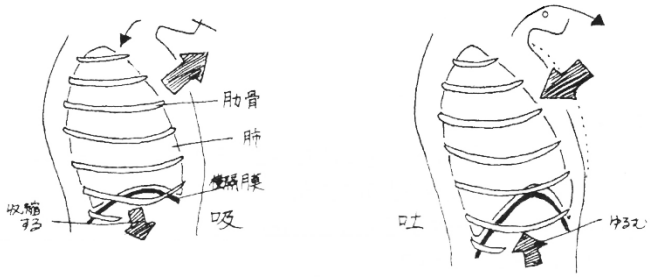



息が入ることで肺が膨らみます。胸式呼吸は肺が大きくなった分、「肋骨、胸骨、鎖骨」を広げるのです。対して、腹式呼吸は肺が大きくなった分、「横隔膜」が下に下がるのです。その結果、**お腹が膨らみます**。

では、実際に腹式呼吸をしてみましょう。

息を吐く…横隔膜が緩んで（上がって）、おなかがへこみます。

息を吸う…横隔膜が収縮して（下がって）、おなかが膨らみます。




続いて実際に息を流してみましょう。

**腹式呼吸の練習は息を吐ききることから始まります**(息を「吸う」ことから始めていけません)。まず、もうこれ以上吐けないというところまで体に入っている空気を吐き出します。そして出し切ったら筋肉の力を抜きます。すると自然に空気が入り、無駄な力が入っていない状態で空気を受け入れることができます。次に息を吐きます。息を吐くにつれて、お腹が凹んでいくのを確認しましょう。

♪ チェック

- □ 無駄な力が入っていないか？
- □ 先にやった姿勢が崩れていないか？
- □ 息を吐ききっているか？吐ききったあとは、おなかを緩めるだけ。
- □ 息を吸ったときに胸（肩）が上がらないようにできているか？
- □ 息を流したときにあごに力が入っていないか？

## 3-2. 【発展】丹田とお腹の支え

3-1 では、腹式呼吸で息を吸ったり吐いたりということをしてきました。しかし、これだけでは実際の歌で長いフレーズを歌う時は、息が足りなくなってしまいます。

肺は風船のようなもので、肺自体には筋肉はついていません。その状態で口を開くと、空気がどんどん出て行ってしまいます。そのため、**空気が出て行く量を調節**しなければなりません。このための方法として、主に①喉を締めて空気の出口をせまくする。②丹田を使って息をキープする。という二つの方法があります。しかし、①の方法を使うと、綺麗な声が出せません。そのため、②の方法を身につけます。

**丹田**は、**おへその指 3 つ分下**辺りにあり、お腹のまわりの筋肉が集まっている所です。ここを、前に押し出すようにしながら息を出すことで、喉を締めずに息をキープすることができるようになります。これを支えといいます。

丹田の練習をやる前に、腹式呼吸が完全に出来るようになっているか、確認しましょう。丹田と支えについては難しいので、焦らずに練習しましょう。

■ 練習

- □ 丹田に手をあてて跳ね返してみる
- □ 4 拍→8 拍→16 拍→（32 拍）の順にブレスを流す
- □ 出来たらだんだん拍を短くしていく

## ～吐く息はおなかで調節しましょう！～

♪ チェック

□ 息を吐ききっている。

□ 息を均等に吐けている。吐く息はおなかでコントロールするように。

□ 以下のようになっていないか？

×息を流したときにあごに力が入ってしまう。

→あごを動かしながらでもできると、脱力できている証拠！

×途中で息が足りなくなってしまう。

→丹田がうまく使えてないか、他のところにも力が入っているかも。

×ブレスが浅くなっている。

→息を吐ききったら、いい姿勢で、お腹をゆるめるだけ！

歌を歌う時にも丹田を意識した呼吸を自然に行う必要があります。また、丹田をうまく使うためには、丹田の周りの筋肉（呼吸筋）を鍛えることが大事です。ここでは、呼吸筋を鍛える方法を一つ紹介します。

■犬ブレス（ワンちゃんの呼吸法）

目的：お腹の動きと呼吸を結びつける練習をする・呼吸筋を鍛える

① 正しい姿勢をとります。

② 両手をへそからみぞおちにかけておきます。

③ 腹部をすばやく小さく動かしながら呼吸を繰り返します。

夏の暑い日に、犬が舌を出してお腹を動かしながら呼吸をしているのを良く見かけます。そのまねをするような感じで 10～30 秒くらいを 1 セットにして練習します。いきなりたくさんやると、貧血してしまうので気をつけてください。最初は、あまり長くできなくてもかまわないので、自分のペースで練習しましょう。

# ４．歌ってみよう！

今まで、歌うための体の使い方や呼吸のやり方について準備をしてきました。今度は実際に声を出してみましょう。

声を出す上で一番大切なこと、それは「**口の奥を開いて共鳴させる**」ことです。声そのものは、声帯の振動によって発生しますが、それを共鳴させることによって初めて、美しい、響く声を獲得できます。

トンネルや洞窟の中で声を出すと普段よりよく響きます。これは、トンネルや洞窟の内壁で声が共鳴しているからです。口の奥を開いて発声することで、トンネル・洞窟のように共鳴させることが出来ます。

＊口の奥を開くとき、以下のことに注意してみましょう。

**１　口を縦に開く**

口が横に広がらないよう、こいのぼりのように縦に長い口を作りましょう。

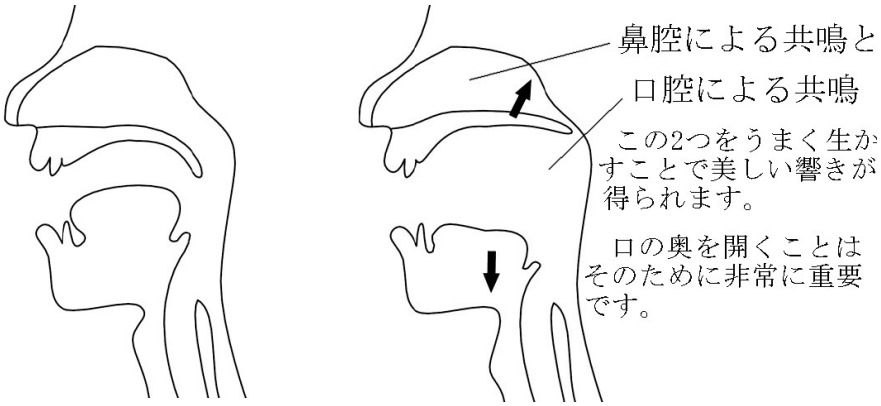
**２　奥歯の間を開ける**

奥歯と奥歯の間の空間を広げるイメージで、口を開きます。

**３　舌を下げる**

舌の力を抜き、リラックスすると自然に下がります。これもあくびの感覚で。

以上の事に注意すると、口の奥が右下図のように開きます。こうすると共鳴によって、美しい、響く声が出るわけです。この時も、体、特に口やあご、首周りに余計な力が入っていないか確認して下さい。**基本はあくまでリラックス**です。




通常時　　口の奥を開いた状態

## ハミングについて　～響きの基本～

[ng]：日本語の「りんご」の「ん」の時の音
[n]：日本語の「な」を発音するときの子音
[m]：日本語の「ま」行を発音するときの子音

特にこの中で大事なのは「ng」ハミングです。この音を出しているときの響きの位置はすべての声の基本となる位置なので、早めにマスターしましょう。次に説明する母音についてもハミングからつなげることで豊かな音になりやすいです。（んご～、んが～など）

## 母音の話　～響きを保ったまま発音する～

日本語には「ア・イ・ウ・エ・オ」の５つの母音があります。普通に日本語を話していると、特に「イ」や「ウ」の母音で口の奥が狭くなりがちですが、歌うときにそうなってしまうと、響きのない声になってしまって良くありません。では、どうすればいいのでしょうか？

| |
|---|
| まず、口の奥を開いて「ア」を発音しましょう。「ア」は全ての母音の基本です。 |

他の母音については、「ア」を基本として、以下のように「ア」から変化させて発音してみましょう。

「ア」　→　「エ」　→　「イ」

奥歯の間の空間が狭くならないように気をつけて、母音を変えます。「イ」のときに口が横にならないようにこいのぼりをしながら、声を前に集めるようなイメージで出してみましょう！

「オ」　→　「ウ」

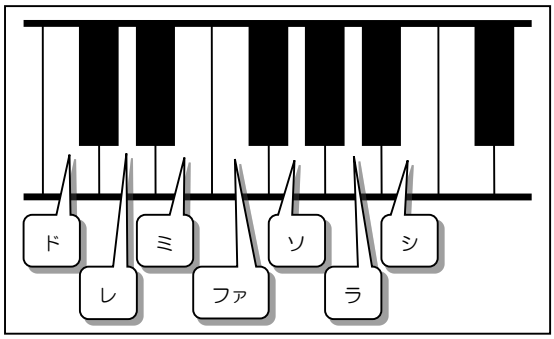
「オ」の広い空間は保ったまま、唇を前に突き出すイメージで「ウ」に変化させましょう。

# ５　上級生に聞いてみよう！

ヴォイストレーニングでは、新入生１人につき上級生１人がついて新入生の発声を見てくれます。体に余計な力が入っていないか、ブレスをしたり声を出したりするときにお腹が使えているか、口の奥が開いているか、などについて見てもらって下さい。何か分からないことがあったら**気軽に聞いてみましょう！親切に教えてくれるはずです。**

# 第２章　基礎知識

## １．ドはドーナツのドじゃないよ！～音の呼び方～




みなさんは音の呼び方といえば、普通は「ドレミ…」を思い浮かべますよね。でも、実際には「ドレミ…」以外の呼び方も存在するのです。

そこで、以下に4種類の音の呼び方(ドイツ式・イタリア式・アメリカ式・日本式)をまとめました。表を見ると分かるように、「ドレミ…」という呼び方は、実はイタリア式の呼び方なのです。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ドイツ | C<br>(ツェー) | D<br>(デー) | E<br>(エー) | F<br>(エフ) | G<br>(ゲー) | A<br>(アー) | H<br>(ハー) |
| イタリア | Do<br>(ド) | Re<br>(レ) | Mi<br>(ミ) | Fa<br>(ファ) | Sol<br>(ソ) | La<br>(ラ) | Si<br>(シ) |
| アメリカ | C<br>(シー) | D<br>(ディー) | E<br>(イー) | F<br>(エフ) | G<br>(ジー) | A<br>(エー) | B<br>(ビー) |
| 日本 | ハ | ニ | ホ | ヘ | ト | イ | ロ |

半音上がる場合

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ドイツ | Cis<br>(ツィス) | Dis<br>(ディス) | Eis<br>(エイス) | Fis<br>(フィス) | Gis<br>(ギス) | Ais<br>(エイス) | His<br>(ヒス) |
| イタリア | Do<br>diesis | Re<br>diesis | Mi<br>diesis | Fa<br>diesis | Sol<br>diesis | La<br>diesis | Si<br>diesis |
| アメリカ | C<br>sharp | D<br>sharp | E<br>sharp | F<br>sharp | G<br>sharp | A<br>sharp | B<br>sharp |
| 日本 | 嬰ハ | 嬰ニ | 嬰ホ | 嬰ヘ | 嬰ト | 嬰イ | 嬰ロ |

半音下がる場合

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ドイツ | Ces<br>(ツェス) | Des<br>(デス) | Es<br>(エス) | Fes<br>(フェス) | Ges<br>(ゲス) | As<br>(アス) | B<br>(ベー) |
| イタリア | Do<br>bemolle | Re<br>bemolle | Mi<br>bemolle | Fa<br>bemolle | Sol<br>bemolle | La<br>bemolle | Si<br>bemolle |
| アメリカ | C<br>flat | D<br>flat | E<br>flat | F<br>flat | G<br>flat | A<br>flat | B<br>flat |
| 日本 | 変ハ | 変ニ | 変ホ | 変ヘ | 変ト | 変イ | 変ロ |

※1　**嬰（えい）と♯（シャープ）は「半音上げる」、変（へん）と♭（フラット）は「半音下げる」**ことを意味します。「半音」については後にやります。

**クライネスでは基本的に音名のことをドイツ語読みで扱います。**

Q.　♭と♯の他に変化記号はあるの？
A.はい、あります。「その音の全音下げる」のを「ダブルフラット 𝄫 」、「その音の全音上げる」記号を「ダブルシャープ 𝄪 」といいます。調合で一度半音変化、さらにそこから半音変化、結果的に五線譜の位置から全音下がるときに使います。

## *Column*　「ティ」とは？

クライネスにいると、「ティ」という音の名前を呼ぶ人がいます。この「ティ」とは何の音のことでしょうか？

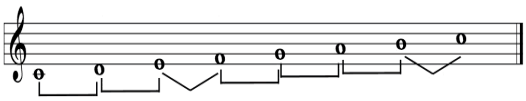
実は、「ティ」は「シ」という音の別の呼び方なのです。ちなみに東アジア(日本)と半分くらいのヨーロッパの国は「シ」という呼び方を使っていて、アメリカやハンガリー等の国は「ティ」という呼び方を使っています。クライネスでは「ティ」を使っています。また、ハンガリー式にならって、「ド♯」「ファ♯」「ソ♯」「シ♭」をそれぞれ「ディ」「フィ」「スィ」「タ」とも言います。

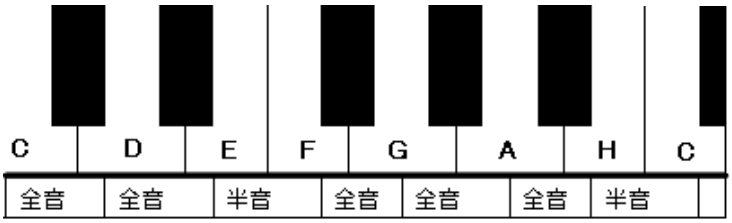
| | | d<br>(ド) | r<br>(レ) | m<br>(ミ) | f<br>(ファ) | s<br>(ソ) | l<br>(ラ) | t<br>(ティ) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ♯ | 半音<br>上がるとき | di<br>(ディ) | ri<br>(リ) | -<br>( - ) | fi<br>(フィ) | si<br>(スィ) | li<br>(リ) | -<br>( - ) |
| ♭ | 半音<br>下がるとき | da<br>(ダ) | ra<br>(ラ) | ma<br>(マ) | -<br>( - ) | sa<br>(サ) | lo<br>(ロ) | ta<br>(タ) |

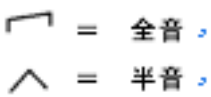
# 2．全音、半音とは

ところで鍵盤上で隣あう音との間隔は一定ではないことを知っているでしょうか。

CとD、DとE、FとG、GとA、AとHの音の間隔は、EとF、HとCの間の二倍あります。CとD、DとE、FとG、GとA、AとHは「**全音違う**」と言い、EとF、HとCは「**半音違う**」と言います。周波数的には全音上がると2の1/6乗倍になり、半音上がると2の1/12乗倍になります（平均律の場合）。

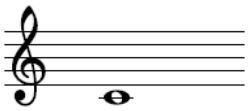




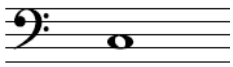



# ３．ト音記号、ヘ音記号について

ト音記号、ヘ音記号は、五線譜のどこを「C」にするのか指定する記号（音部記号）です。このどこに音符があるかによって出す音が決まります。



ト音記号



ヘ音記号

上の五線譜に書いてある音がそれぞれの記号で書いてある際の「C」、つまり「ド」の音を表しています。

***System***

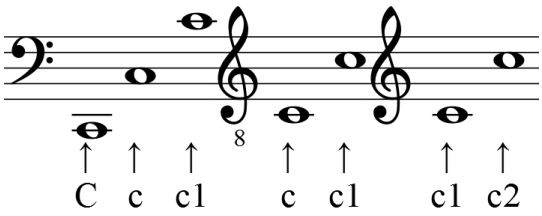
ト音記号の場合は五線からさらに一つ下の線に刺さった音が C、ヘ音記号の場合は下から 2 本目と 3 本目の線に挟まれた音が C（上図の場所）になります。そしてその場所から一つ（線と線の間隔の半分）上がるごとに、D、E、F、G、A、H、となり、一つ下がるごとに、H、A、G、F、E、D、と変わっていきます。

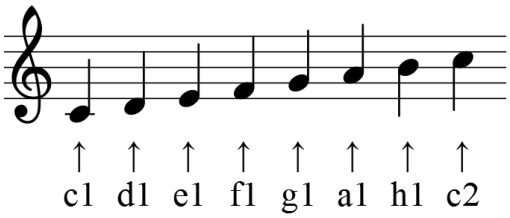
**ソプラノ、アルトの方はト音記号、ベースの方はヘ音記号でほぼすべての楽譜が書いてあります。テナーの方は楽譜によって違うので大変ですが、両方使えるようにしましょう！**

## ※補足

また、C は C でも様々な高さの C があるのはわかりますよね。C から 1 オクターブ上がるとまた C に戻ります。しかし、すべて C と言っているとわかりづらいので、呼び名が決まっています。
(これはドイツ式の表記です。アメリカ式・日本式などもよく使われます。)

音の高さでみると下から 1C=(ヘ音記号下第５間)、C=(ヘ音記号の下第 2 加線)、c=(ヘ音記号の第 2 間)、c1=(ト音記号の下第 1 加線)（ピアノの真ん中)、c2=(ト音記号の第 3 間)、c3=(ト音記号の上第 2 加線)になります。また、音名の右の数字は C から始まり H で終わり、その一つ上の C からまた数字がひとつ変わります。
また、他の呼び名もありますが、詳しく知りたかったら上級生に聞いてみてください！




※左の図の、真ん中のト音記号の下に書いてある「8」は「8va bassa（オッターヴァバッサ）」といい、**通常よりも 1 オクターブ下げる**ことを意味しています。

# 第３章　楽譜を読んでみよう

## １．８分～全音符、休符

各音符、休符によって、音の長さ、休みの長さが決まります。

| | | | |
|---|---|---|---|
| | **8 分音符**といいます。四分音符の半分の長さになります。 | | **8 分休符**といいます。四分休符の半分の長さになります。 |
| | **4 分音符**といいます。 | | **4 分休符**といいます。四分音符と同じ長さだけ休みます。 |
| | **2 分音符**といいます。四分音符の二倍の長さになります。 | | **2 分休符**といいます。四分休符の二倍の長さになります。 |
| | **全音符**といいます。四分音符の四倍の長さになります。 | | **全休符**といいます。四分休符の四倍の長さになります。 |

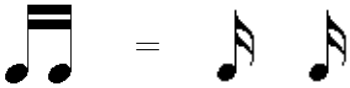
※音の高さを表現せず、リズムのみを表現する歌い方を「リズム読み」といいます。

## ２．16 分以上の音符、休符

16 分音符

32 分音符

8 分以上の同じ音符が二つ以上続いた場合、旗をくっつけて表記します



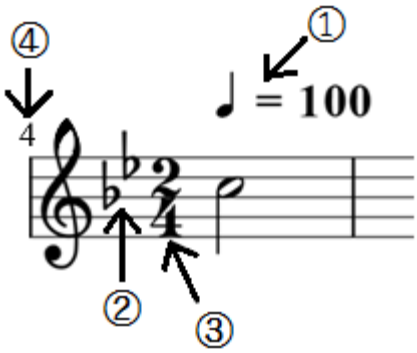
16 分以上の休符の場合も同様に、数が 2 倍になるごとに長さが半分になっていき、休符の出っ張りが一つずつ増えていきます。

16 分休符　 32 分休符　

## ３．付点

音符、休符に点がつくと、音、休みの長さが1．5倍になります。

## ４．音符、休符以外の記号




①テンポ記号

「（音符）＝（数字）」があったらこれです。曲の速度を表すもので、1 分間にその音符が数字の分だけ出せる速度であることを意味します。上図の場合、1 分間に 4 分音符が 100 回出せる速度という意味です。

「Andante（歩くような速さで）」のようにイタリア語などで書かれることもありますが、そのときはおよそのテンポになります。

②調号

移動ドの章（第 4 章）で詳しく説明します。

③拍子記号

拍子記号はその曲のリズムを表すもので、一小節に分母の分の音符が分子の数だけ入ることを意味します。上図の場合、一小節に四分音符が2つ入る事を意味します。

④小節番号

楽譜の各段の左端にあります。この場合はこの小節が 4 小節目であることを示しています。書いてない場合もあるので、そのときは自分で書きこむようにしましょう。

特殊な拍子記号

「コモン」と読み、意味は「4 分の 4 拍子」と同じです。

「アラブレーベ」と読み、意味は「2 分の 2 拍子」と同じです。

# 5．重要な記号

演奏記号については第6章で詳しく説明しますが、特によく出てくる記号をここで紹介します。これだけはぜひとも覚えてしまいましょう。

速さに関係する記号

| | | |
|---|---|---|
| ritardando (rit.) | リタルダンド | だんだん遅く |
| accelerando (accel.) | アッチェレランド | だんだん速く |
| a tempo | ア・テンポ | もとの速さで |

| | | |
|---|---|---|
| meno mosso | メーノ・モッソ | 今までより遅く |
| piu mosso | ピウ・モッソ | 今までより速く |
| Tempo primo (tempo I) | テンポ・プリモ | 最初の速さで |

強さに関係する記号

| | | |
|---|---|---|
| ***ppp*** | ピアニッシシモ | 非常に弱く |
| ***pp*** | ピアニッシモ | とても弱く |
| ***p*** | ピアノ | 弱く |
| ***mp*** | メゾ・ピアノ | やや弱く |
| ***mf*** | メゾ・フォルテ | やや強く(普通の強さで) |
| ***f*** | フォルテ | 強く |
| ***ff*** | フォルティッシモ | とても強く |
| ***fff*** | フォルティッシシモ | 非常に強く |

| | | |
|---|---|---|
| crescendo (cresc.) < | クレッシェンド | だんだん強く |
| decrescendo (decresc.) > | デクレッシェンド | だんだん弱く |
| diminuendo (dim.) | ディミヌエンド | |

| | | |
|---|---|---|
| ***sf*** | スフォルツァンド | その音だけ強く |
| > | アクセント | その音を強調して |

接頭語

| | | |
|---|---|---|
| poco ○○ | ポーコ | 少し○○ |
| poco a poco ○○ | ポーコ・ア・ポーコ | 少しずつ○○ |
| molto ○○ | モルト | 非常に○○ |
| sempre ○○ | センプレ | 常に○○ |
| senza ○○ | センツァ | ○○しない |

# 第４章　移動ド入門

## １．移動ドとは？～固定ドと移動ド～

第２章「音の呼び方」のところで、ドレミ以外にも、音の呼び方がいろいろあると言いましたが、実はその呼び方は**「音名」**と**「階名」**とに分かれているのです。

**・音名…**

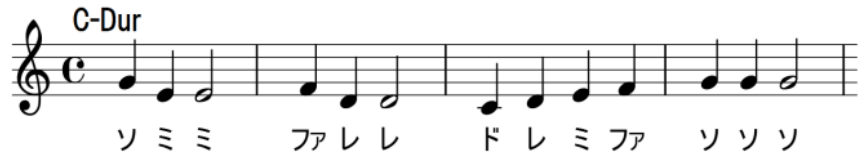
全ての音の名前を一通りに決める呼び方です。音の住所のようなもの。

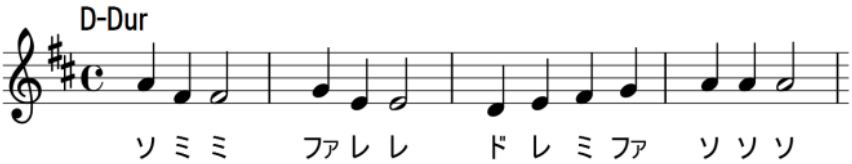
例えば、皆さんは普通ドの音を「ド」、レの音を「レ」と言いますよね。何を当たり前な事をと思うかもしれませんが、皆さんが普段使っているこの「ド、レ、ミ…」の使い方は「音名」です。

**・階名…**

こちらは、馴染みのない人が多いかもしれません。ある基準の音を決めて、その音との相対的な高さを言うときは**「階名」**を使います。基準の音が異なっていても、基準の音からの高さが同じ音同士なら、それらは必ず同じ「階名」になります。

「階名」についての具体例を見てみましょう。




上の楽譜は2つとも「ちょうちょ」ですが、音の高さが違っています。これは、調(カラオケで言う「キー」のようなもの。後で詳しく説明します)が異なるからです。しかし、音の位置関係は変わらないので、どちらも階名は同じになるのです。

音名が音の絶対的な高さを表すのに対して、階名は音の相対的な高さを表しているといえます。

音楽の世界において、その音名と階名についての使い分けのルールがいくつか存在します。このルールは完璧に統一されていないのですが、大きく分けて2つのシステムがあります。ここではその2つのシステムと、それにおける音の呼び方のルールを説明します。

## *System 1* 移動ド

階名のうち、イタリア語の「ドレミファソラティ(シ)ド」を用いたものが**「移動ド」**と呼ばれます。音名はドイツ語(ツェー、デー、エー)で表現することで階名と区別します。音楽史上、元々イタリア語の「ドレミ…」は、階名としてのみ使用されていました。

イタリア語の「ド」は絶対的な高さと関係なく、曲の調によって移動している(ように見える)ため、このシステムは**「移動ド」**と呼ばれます。

## *System 2* 固定ド

音名には一般的に、日本語「ハ、ニ、ホ…」ドイツ語「C(ツェー)、D(デー)、E(エー)」英語「C(スィー)、D(ディー)、E(イー)」が使用されますが、近代になりイタリア語を音名に使う文化が出始めました、これを「**固定ド**」と呼びます。固定ドが誕生したため、区別のために階名で用いるイタリア語は「移動ド」と呼ばれるようになりました。

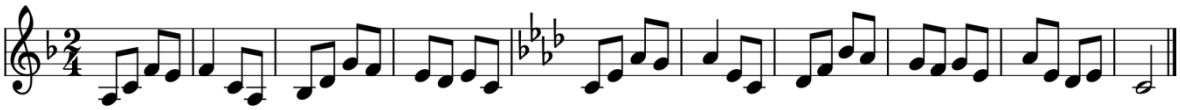
イタリア語の「ド」は曲と関係なく、同じ高さに固定しているため、このシステムは**「固定ド」**と呼ばれます。

## *Column*

おそらく99%くらいの音楽の経験者は固定ドのシステムを使用してきたことでしょう(ヤマハ音楽教室は固定ドシステムを使っているそうです)。逆に、移動ドのシステムの存在を知っている人は少ないと思われます。
クライネスでは移動ドシステムを使っています。いや正しく言うと、クライネスでは移動ドシステムを使うようにしています。ただ、多くの人が音名(絶対的な音の高さ)を「ドレミ」で呼ぶことに慣れているため、クライネスもそれを認めています。

## ２．How to移動ド…～移動ドってどうやって使うの？～

ここで、説明のために以下の曲を使います。



これはJR山手線の五反田駅などの発車メロディーで使用されている曲です。

ピンと来ないという人も歌えたら思い出せるかもしれません。この楽譜に移動ドを振って(※)みましょう。

※音に名前を対応させることを**「振る」**と呼んでいます(ふりがなを振る、と同じ用法)。つまり、移動ドで使う階名を音に対応させる作業は「移動ドを振る」と呼びます。

### 1. 調を知る

調とは、「その曲が何の音を基準とした(つまり、何の音をドとした)音階で出来ているか」を表すものです。調が分からないと階名(移動ド)が使えません！問題はどうやって調がわかるようになるか、ということですよね。クライネスでは基本的に、**楽譜をもらった後その曲の移動ドの調がメール連絡で流れます。**移動ドを振る際はこれを利用しましょう。

調は絶対に決まっているものではなく、人によって捉え方はそれぞれです。しかし普通は、移動ドのつけ方が最も自然になるように調を選びます。(上級者になると、自分で移動ドの調を考えることができるようになります。ただし、複雑な曲の場合は人によって解釈が異なる場合があるので、そういう時、**練習においてはメールで送られる調で統一してくださいね**。)

## 2. 楽譜に振る

調が分かったら、実際に移動ドを振る作業に入ります。

例えば、先ほど挙げた曲の調は以下の通りです。

| #1～: F-dur、#5～: As-dur |
|---|

補足:「#」で始まる数字は小節番号(最初から数えて何小節目か)を表します。つまりこの曲の場合は、最初はF-durで、5小節目になるとAs-durに変わる(転調する)ことになります。

①まずは調を楽譜に記しておきます。

転調するところは改めて調を書かなければなりません。

**細かいですが…気を付けて欲しい調名の書き方**

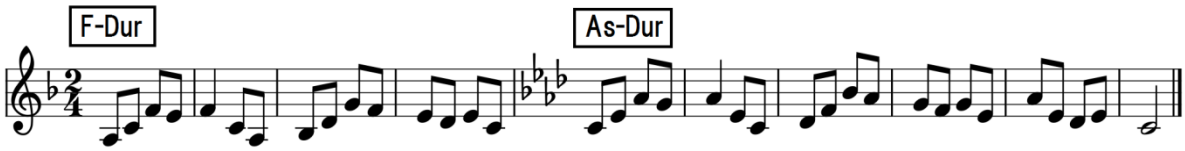
・dur(長調)の場合、その調名の一文字目は大文字で書きます。

（※DurのDは大文字だったり小文字だったりします。）

・moll(短調)の場合、その調名全部を小文字で書きます。

例…E-dur、gis-moll

省略形として、E:やgis:というように、コロン付きで書くこともあります。




②調を書いたら音符に各音符ごとの階名を書きます。次ページの解説とこの冊子の最後にある調の早見表を参考にしてください。

## *System* 階名の振り方

調には「長調」と「短調」があり、使われる音や曲の雰囲気などによって判別されます。

### ➢ 長調の場合

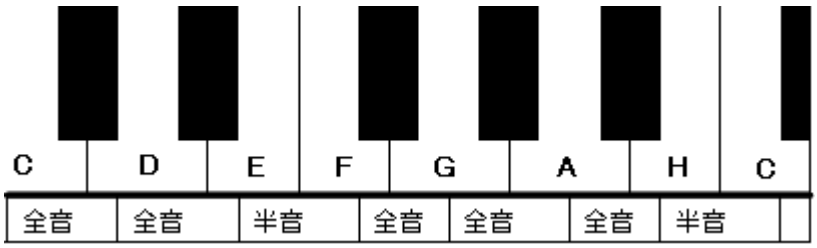
① 長調は「○-dur」表現されているので、○を「ド」の階名にします。
(例)G-dur → G を「ド」の階名

② 次にドレミファソラシは下の図のように全音、全音、半音、全音、全音、全音、半音の間隔が空いているので、そのように間隔を空けながら階名を振っていきます。

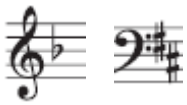
### ➢ 短調の場合

① 短調は「○－moll」で表現され、○を「ラ」の階名にします。
(例)g-moll→G を「ラ」の階名

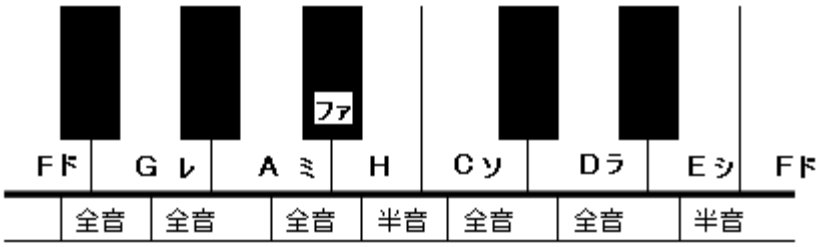
② 全音、半音、全音、全音、半音、全音、全音の間隔を空けながら順番に階名を振っていきます。



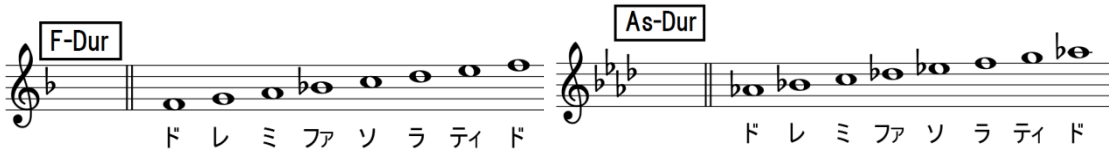
# ３．調号とは



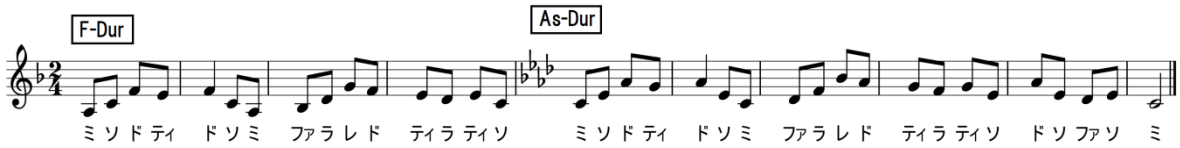
ト音記号、ヘ音記号の右についている♯、♭の事です。この記号の付いている場所の音を半音上げたり下げたりすることを表しています。この記号があることによって、移動ドを使う際にとても楽になります。左上のト音記号のものはF-dur、またはd-mollと置くと




正しく出来ると、




といった感じになるので、これを基に先ほどの楽譜に移動ドを振ってみると、




といった感じになります。

基本的に移動ドを振るのは、音取りのためなら自分のパートだけで十分です。

しかし他のパートのも振ると曲全体のことや和音のことも分かるようになるので、興味がある方は是非他パートの移動ドも振ってみてください。

転調のところはそのまま行かず、新しい調で振りましょう。調が難しくて分からなくなった場合は、<u>この移動ド冊子巻末の早見表を参考にしましょう</u>。

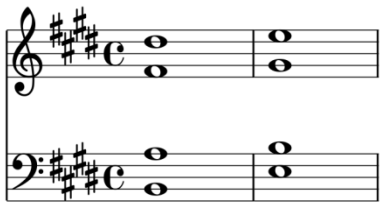
慣れないうちは、上の図のように鍵盤の絵を描くとすこしやりやすくなるかも？

# ４．移動ドをなぜ使う？～初級編～

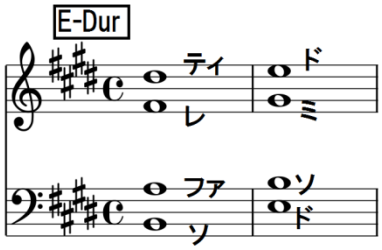
前のページで「固定ド」と「移動ド」を紹介しましたが、クライネスでは「移動ド」を主体として使っています。これは何故なのでしょう？

**・音が取りやすくなる！**

曲を理解するうえで、和音や音の跳躍が複雑で分かり辛い時があります。そこで移動ドを振れば、そういった音の関係も分かりやすくなります。



見てもあまり分からない…




なるほど、分かりやすくなった！

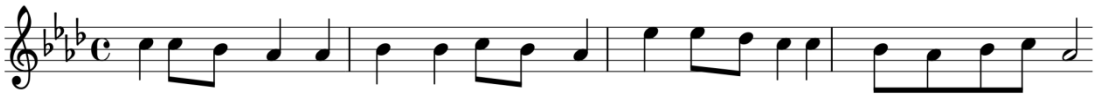
また、固定ドの音感は大きくなってからの訓練ではほとんど育ちませんが、移動ドを使った音感は大きくなってからの訓練でもかなり育ちやすいです。こういったことから、移動ドの方が音を取りやすいということが多いです。

**・曲の理解がしやすくなる！**

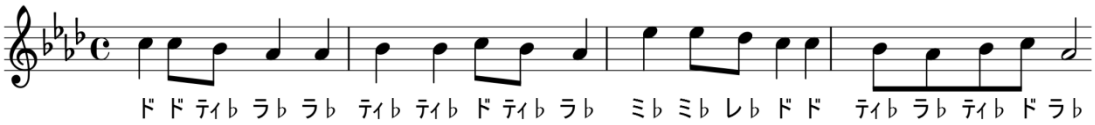
世の中には様々な曲があり、それぞれ異なる「調」を持っています。この「調」には、曲の全体的な雰囲気を決定付ける重要な役割を持っています。

調にもいろいろな種類があり、それによって特定の音に常にシャープやフラットが付くことがあります。これらは固定ドシステムにとって、音の読みやすさを大きく妨げるものとなっています。対して移動ドシステムにとっては、基準となる音を調にあわせて決めてやることにより、階名が分かりやすいものとなります。

例えば…

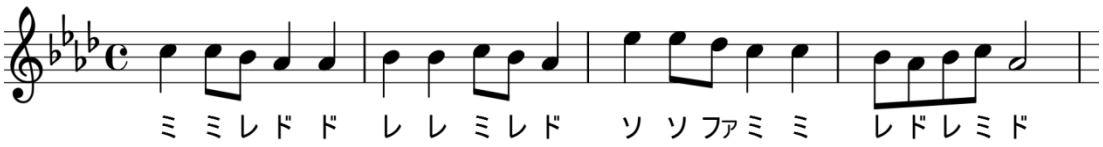


この曲は調が「As-Dur」なのですが、これに固定ドを使って音を読んでみると…




とても分かりにくくなり、読むのも大変です。そこで移動ドを使って音を読んでみると…

移動ドを振ると一応、面倒くさいフラットとシャープがほとんど消えるので、曲を理解するのがとても簡単になります。




なおクライネスでは、音取りをする際は移動ドを歌いながら音を取ります。

**こんなに便利で、さらにいろいろと応用が利くので、積極的に移動ドを使っていきましょう！**

## 5. ＦＡＱ～よくある質問～

### Q. 「転調」って何ですか？

A. **「転調」**は曲の途中で調が変わることです。調は曲の雰囲気を決めているのですが、曲の雰囲気はずっと同じとは限らず、作曲者は曲の雰囲気を変えたい時に曲の中で調を変える、すなわち転調させることがあります。

似たような言葉に「移調」という言葉があります。同じ曲を別の調でやることを「移調」と呼びます。「移調」の場合、固定ドを使うと音の呼び方が変わりますが、移動ドを使うと呼び方が変わりません。

### Q. C-Dur と a-moll は具体的にどう違うんですか？

A.調は雰囲気を作っているので、C-dur と a-moll の違いも雰囲気にあります。え？もっと具体的な答えが欲しいですか？

調には一番大事な基準となる音があります。その音を中心にして他の音が決まっているわけです。C-durとa-mollは移動ドを振ると同じように見えますが、中心になっている一番大事な音が違います。C-durの場合は「C」(ツェー)であるのに対し a-moll は「A」(アー)です。違いはたったこれだけですが、この違いは曲に様々な影響を与えます。

この中心的な音の一番分かりやすい判別方法としては、曲の最後の音を見る方法があります。多くの場合、C-durかa-mollかどちらかであるかが分かっているとき、最後の音がCだったらC-dur、Aだったらa-mollです。この方法を使えば90%以上の確率で同じ移動ドのdurとmollを区別することができます。

**Q. 自分も自分なりに調を考えてみたいのですがどうすればいいですか？**

A 一番簡単なやり方は楽譜を見ることです。ト音記号とヘ音記号の後ろの所に、調によってシャープやフラットが付いていて、その数も異なります。移動ド早見表を見て同じようなシャープとフラットのパターンの調があれば、その調である可能性は高くなります。このやり方 100%正しいとは限りませんが、簡単な曲の場合はこれでほぼ問題ないです。

**Q. 自分は絶対音感なんですが、音取りに移動ドなんていらないですよ。むしろ取りにくくなりますよ！**

A.確かに絶対音感の人なら移動ド使わなくても音は取れますが、移動ドは音を取るためだけの道具ではないことに注意してください。音の性格を理解するために移動ドが必要になることもよくあります。

**Q. でも移動ドを使ったらせっかく鍛えた音感が鈍くなって相対音感になってしまうじゃないですか？困りますよ！**

A.音取りについては、移動ドで歌うとき、移動ドを言うのが辛かったら「no 唱」と言って「ノ」で歌っても構いません。移動ドは口で言うか言わないかの問題ではなく、考え方の問題ですので。
それよりも、絶対勘違いしないで欲しいのが相対音感と絶対音感の関係です。よくある間違いなのですが、**相対音感と絶対音感は背反する関係ではありません。**
相対音感の人は相対的な音の幅がわかる人です。つまりドの音を聞いて自由に5度(ソ)や6度(ラ)の音を正しく歌える人のことです。対して絶対音感の人はある音を聞いてその音名が何かを分かり、歌える人のことです。絶対音感があったら相対音感が付かない、相対音感があったら絶対音階が付かない、なんてことはありません。両方持っている人さえいます。移動ドを使うと、相対音感を身に付けやすくなります。

## 移動ドを使って音感を鍛えましょう！

※ここからの話は発展的になっていくので、初めのうちはあまり
気にしなくても大丈夫です！

# 第５章　音程と調(発展)

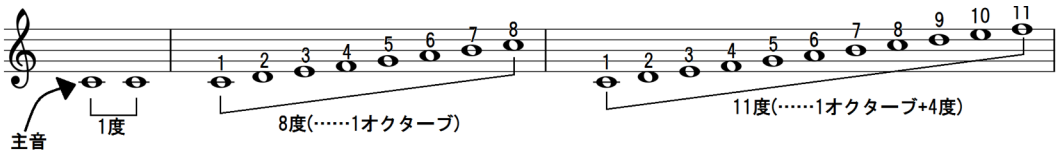
2つの音の幅のことを『音程』といいます。
この『音程』は、度数と完全・長・短等の言葉で表します。

## １．度数

### *System* 度数とは？

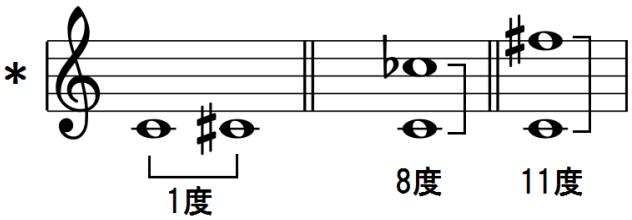
低いほうの音から高いほうの音までの音の数のことを**度数**といいます。

**例**




「低い方の音から数えて何個目の音か」が度数になります。

※度数の数え方は、♯や♭などの”変化記号”が付いていても**変わりません**！！



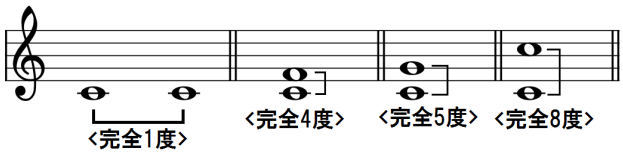

＊のように、変化記号が付いた場合、そうでない場合では”度数が同じ”でも音の幅が変わります。
…では、変化記号がつく場合とつかない場合はどのように区別するのでしょうか？
それが次に紹介する「完全系」と「長短系」です。

# ２．『完全系』と『長短系』

音程は、この**<u>2つの系の度数</u>**に分けられます。

## *System* 完全系

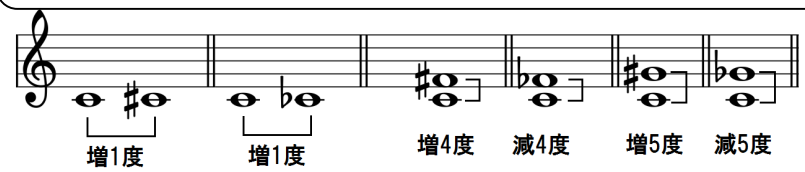
『完全系』･･･›１度、４度、５度、８度、これらの度数が完全系です。
それぞれ完全１度、完全４度、完全５度、完全８度といいます。




黒鍵と白鍵の数（開始と終了含む）
完全4度⇒6コ（全音×２＋半音）
完全5度⇒8コ（全音×３＋半音）
完全8度⇒13コ（全音×６）

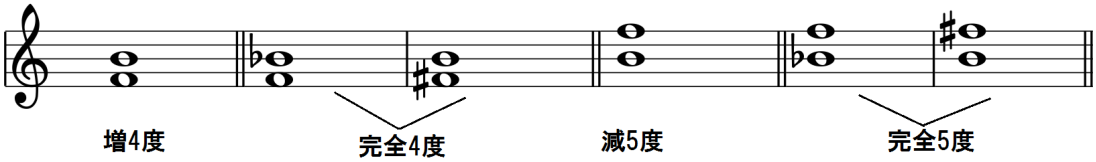
## *System* 増、減

完全音程より”半音広い”、”半音狭い”状態を”<u>増</u>”、”<u>減</u>”で表します。増〇度、減〇度といいます。




（全く同じ音程は「完全１度」で、それより狭くはならないので、「減１度」はありません。）

＊注意　ティ-ファ、ファ-ティは変化記号が付いていない状態で減5度、増4度音程となります。

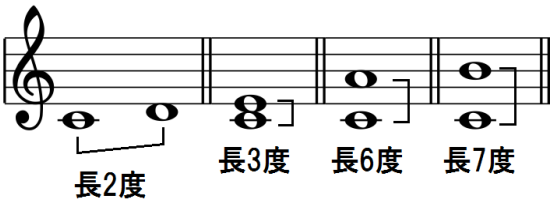



**つまり1、4、5、8度は『減＜完全＜増』で表す、ということです。**

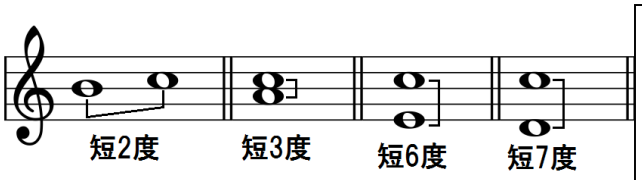
## *System* 長短系

『長短系』…>２度、３度、６度、７度、これらの度数が長短系です。

それぞれ長2度、長3度･･･、短2度、短3度･･･といいます。

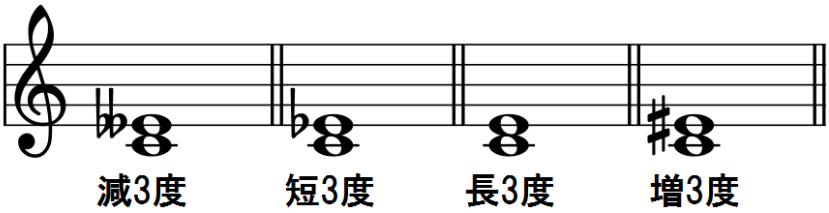



黒鍵と白鍵の数（開始と終了含む）
長2度⇒3コ（全音）
長3度⇒5コ（全音×2）
長6度⇒10コ（全音×4＋半音）
長7度⇒12コ（全音×5＋半音）




黒鍵と白鍵の数（開始と終了含む）
短2度⇒2コ（半音）
短3度⇒4コ（全音＋半音）
短6度⇒9コ（全音×4）
短7度⇒11コ（全音×5）

音程より**半音広い**状態は、完全音程が半音広くなった状態と同じ**”増”**で表します。
長音程より**半音狭い**状態は、短音程で、短音程より**半音狭い**状態は、完全音程が半音狭くなった状態と同じ**”減”**で表します。



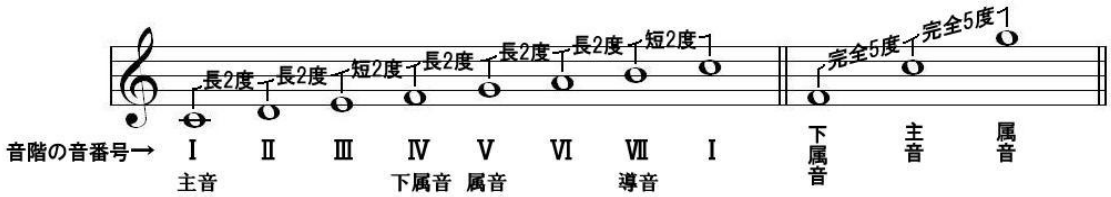

**つまり2、3、6、7度は『減＜短＜長＜増』で表す、ということです。**

完全系、長短系をまとめて図にするとこのようになります↓

# ３．調

調は、特定の音を”主音”としてできる長音階、短音階によって決まります。主音は、C-Dur だったら C の音、G-Dur なら G の音になります。『主音の音名+音階の名称』を合わせて調名といいます。長音階を用いる調を**長調(Dur)**、短音階を用いる調を**短調(moll)**といいます。（普通は短調といえば自然短音階を用いる調を言います）

## <長音階>



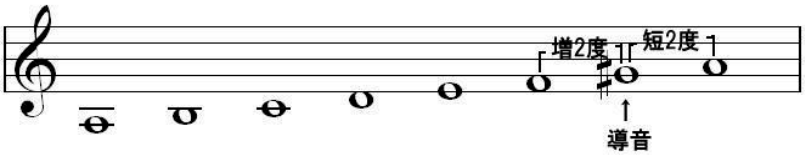

（主音の完全五度下の音を下属音、完全五度上の音を属音、第 7 音に当たる音を導音と言います）

## <短音階>

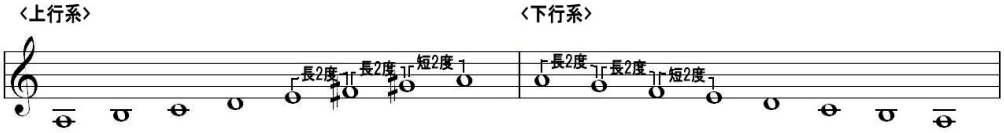
**・自然短音階**

＊短音階のⅦは、臨時記号によって半音高くされ、
「主音」と短2度の関係にあるときのみ導音と呼ぶ。

**・和声短音階**



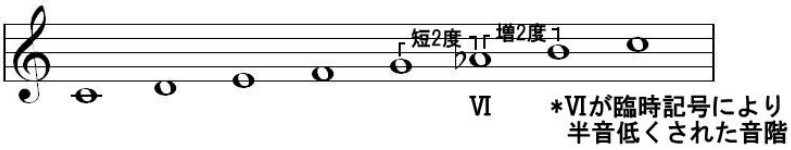

**・旋律短音階**




＊上行系でⅥ・Ⅶが臨時記号によって半音高くなり、下行系で自然短音階に戻る。

## <和声長音階>

この音階を使用する調を MollDur と呼びます。（長調でも短調でもない）



# 4.移動ドをなぜ使う？　～上級編～

## 1.なぜ移動ドを使うのか

第4章では移動ドを使うと音を取りやすくなると述べましたが、よく協和する(ハモる)音も取りやすくなります。以下では協和することに関して少し難しい議論をします。難しい話が嫌いな人は、5.具体的な音の取り方のみご覧ください。

## 2.用語の紹介

音高：漢字の通り音の高さのことです。周波数(1秒間に振動する回数)によって定まります。周波数が高いほど音高が高くなり、低いほど音高が低くなります。

音程：2音の音の高さの幅のことです。すなわち周波数の幅のことですが、2つの周波数の差ではなく比を指す。

倍音：ある音を鳴らした際に聞こえる、元の音の自然数倍の周波数を持つ音のことです。練習中に「倍音を聞いてみて」などと言われることがあるかもしれません。

(難しい話)

自然界で発生する任意の音の周波数を$f(t)$(tは時間)とすると$f$は連続な関数である(とみなして良いと思われる)のでフーリエ級数展開が可能です。これによってもとの周波数をもつ波とその自然数倍の周波数の波の無限和として表されるので倍音が聞こえます(たぶん)。もっと詳しく知りたい人は自分で勉強してみよう！

## 3.協和するとは

1.で移動ドを使うとよく協和する音が取りやすくなると述べましたが、ここでは協和するということについて簡単に説明します。ここでは簡略化した説明しかしないので興味を持った人は詳しそうな人、文献にあたってみてください。

結論から言うと複数の音を鳴らしたときにそれらの倍音が低めの倍音から一致すればするほど協和しているように聞こえます。

次に説明する純正律の構成法でA-durのA,Cis,E,Gisの周波数を表にすると次のようになります(Aの周波数を220Hzとしている)。AとCisの倍音が一致する部分は斜体に、AとEの倍音が一致する部分は太字に、AとGisの倍音が一致する部分は下線が書かれています。

| | 1倍音 | 2倍音 | 3倍音 | 4倍音 | 5倍音 | 6倍音 | 7倍音 | 8倍音 | ～ | 15倍音 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 220 | 440 | **660** | 880 | *1100* | **1320** | 1540 | 1760 | | ***<u>3300</u>*** |
| Cis | 275 | 550 | 825 | *1100* | 1375 | 1650 | 1925 | *2200* | | 4125 |
| E | 330 | **660** | 990 | **1320** | 1650 | **1980** | 2310 | **2640** | | 4950 |
| Gis | 412.5 | 825 | 1237.5 | 1650 | 2062.5 | 2475 | 2887.5 | <u>3300</u> | | 6187.5 |

(単位はHz)

これを見ると、AとEやAとCisは倍音が一致するのが早く(低次)、AとGisの倍音が一致するのは遅いことがわかります。実際にAとEやAとCisを同時に鳴らせばよく協和し、AとGisはそこまで協和しないことが確認できると思います。

## 4.音律について

3.で周波数の表を提示しましたが、実は各音について普遍的な音高(すなわち周波数)というものは定まっていません。基準音の周波数が与えられた際に他の音の音高を定めるルールを音律と呼びます。つまりdに対する他の音の周波数比です。ここではよく使われる音律として「純正律」と「平均律」を紹介します。

### 4.1 純正律

純正律とはdに対する周波数比が簡単な整数比となるようにr,m,f,s,l,tを定める音律です。和音がよく協和することが特徴で、人の声など音高を自由に変えられる楽器では基本的には純正律で演奏する

のがよいとされています。これは3.でみた協和する音の関係である周波数比4:5および2:3のみを用いて作られるからです(4:5は上の表のAとCis、2:3はAとE)。構成方法は以下の通りです。主音dの周波数は与えられているとします。

①dの周波数の$\frac{5}{4}$倍をmの周波数、$\frac{3}{2}$倍をsの周波数とする。

②①で求めたsに対して①と同様の操作を行う。すなわち、sの周波数の$\frac{5}{4}$倍をtの周波数、$\frac{3}{2}$倍をrの周波数と定める。

③fの周波数の$\frac{3}{2}$倍がdになるようにdの周波数の$\frac{2}{3}$倍をfの周波数とする。またfに対して①と同様の操作をして、fの$\frac{5}{4}$倍をlの周波数とする。

| 階名 | f | l | d | m | s | t | r |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 周波数比 | $\frac{2}{3}$ | $\frac{5}{6}$ | 1 | $\frac{5}{4}$ | $\frac{3}{2}$ | $\frac{15}{8}$ | $\frac{9}{4}$ |

表4.1.1　①～③で求められる周波数比

④すべての音がdより高く、かつdから1オクターブ内に存在するように1オクターブ上げる(すなわり周波数を2倍にする)または1オクターブ下げる(周波数を$\frac{1}{2}$倍する)。

| 階名 | d | r | m | f | s | l | t |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 周波数比 | 1 | $\frac{9}{8}$ | $\frac{5}{4}$ | $\frac{4}{3}$ | $\frac{3}{2}$ | $\frac{5}{3}$ | $\frac{15}{8}$ |

このように構成される純正律ですが鍵盤楽器などには向きません。それは同じ音名であっても転調すると音高が変わってしまうからです。例えばC-durとC-durの第5音Gをもとにつくったg-durでは周波数は以下のようになる。C-durとG-durは近い調と言われているが、その2つの調でも音高が異なる音が存在してしまい、鍵盤楽器等の音高を自由に変えられない楽器には純正律はふさわしくないことがわかります。

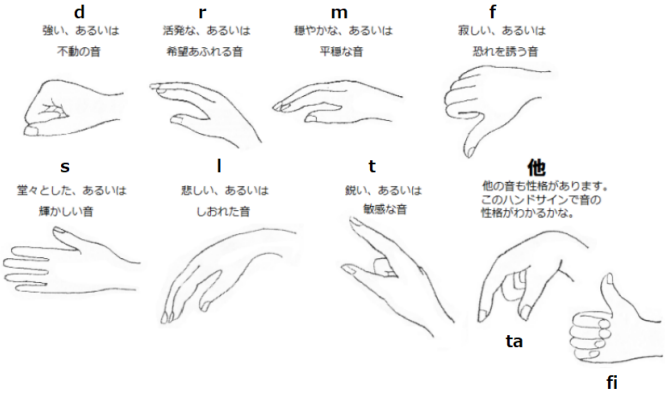
| | C | D | E | F | Fis | G | A | H |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| C-dur | 1 | $\frac{9}{8}$ | $\frac{5}{4}$ | $\frac{4}{3}$ | | $\frac{3}{2}$ | $\frac{5}{3}$ | $\frac{15}{8}$ |
| G-dur | 1 | $\frac{9}{8}$ | $\frac{5}{4}$ | | $\frac{45}{32}$ | $\frac{3}{2}$ | $\frac{27}{16}$ | $\frac{15}{8}$ |

## 4.2 (十二)平均律

どの調でもそれなりに調和するように作られたのが平均律です。平均律ではすべての半音の幅が等しくなるように周波数を定めます。1オクターブ上の音(周波数は2倍)との間には半音が12個存在しているのですべての幅が等しくなるためには周波数比$k$は　$k^{12} = 2$　を満たす必要があります。よって平均律では半音の周波数比はすべて$\sqrt[12]{2}$となります。

## 5.純正律の実践

4.1で純正律を紹介しましたが実際に歌っているときに狙った周波数を出せる人間はあまりいないと思います。そこで用いられるのがコダーイのハンドサインです。この図は音の性質を表しているので、移動ドを振った後にこれを見てどのような音を出すべきか理解すると良いでしょう。



# 第6章　演奏記号（発展）

　第3章の末尾で最頻出の記号をご紹介しましたが、こちらではよく使われる様々な演奏記号をご説明します。

## 1. 速度記号

速度の示し方には、メトロノームの数字を用いる「メトロノーム記号」と言葉によりおおよその速度を示す「速度標語」があります。メトロノーム記号は定量的であるのに対し、速度記号は主観的であるという特色があります。

| | | |
|---|---|---|
| 遅め | | |
| Grave | グラーヴェ | 重い、深刻な、厳粛な |
| Largo | ラルゴ | 幅広い、ゆったりとした |
| Adagio | アダージョ | ゆっくり、そっと、慎重に |
| Lento | レント | 遅い、ゆったりした、たるんだ |
| 中程度 | | |
| Andante | アンダンテ | 歩いている、歩きつつ、進みながら |
| Moderato | モデラート | 控えめの、程良い、節度ある |
| 速め | | |
| Allegro | アレグロ | 陽気な、快活な、楽しげな、明るい |
| Vivace | ヴィヴァーチェ | 生き生きとした、活発な、敏捷な |
| Presto | プレスト | 素早く、急いで、速く |

- **速度標語の代わりに用いられる発想標語** ※発想標語については後の項目で。
  速度標語として用いられる場合は大文字で書き始められる

| | | |
|---|---|---|
| 遅く | | |
| Affettuoso | アッフェットゥオーソ | 情趣豊かに、優しさを込めて |
| Amoroso | アモルーゾ | 愛情を込めて |
| Cantabile | カンタービレ | 歌うように |
| Maestoso | マエストーソ | 堂々と、威厳をもって |
| Meno mosso | メノ・モッソ | あまり活発でなく |
| Mesto | メスト | 悲しげに、嘆くように |
| Pesante | ペザンテ | 重々しく |
| Sostenuto | ソステヌート | 音の長さを十分に保って |
| Tranquillo | トランクィッロ | 静かに、平静に |
| 速く | | |
| Agitato | アジタート | 興奮して |
| Animato | アニマート | 活気づいて |
| Con moto | コン・モート | 動きをもって、速く |
| Mosso | モッソ | 動いて、活発に、速く |
| Scherzando | スケルツァンド | 戯れるように |
| Spiritoso | スピリトーゾ | 活気をもって |
| Veloce | ヴェローチェ | 素早く、敏速に |
| Vivo | ヴィーヴォ | 生き生きと |
| Volante | ヴォランテ | 飛ぶように、急速に |

- **付加語**

| 意味を強める | | |
|---|---|---|
| possible | ポッシービレ | できるだけ |
| molto (di molto) | モルト | 非常に、極めて |
| assai | アッサイ | 大いに、十分に、かなり |
| piu | ピウ | さらに、もっと |
| 意味を弱める | | |
| un poco | ウン・ポーコ | やや、少し |
| poco | ポーコ | わずかに、あまり～でなく |
| non troppo | ノン・トロッポ | 過度に～でなく |
| non tanto | ノン・タント | あまり～でなく |
| meno | メノ | より少なく、あまり～でなく |
| その他 | | |
| di | ディ | ～の |
| ma | マ | しかし |
| quasi | クアジ | ～のように |
| sempre | センプレ | 常に |

※”piu”は前と比較して意味を強める言葉の為、”piu***f***”は「今までより強く」”piu***p***”は「今までより弱く」となります。”meno”は前と比較して意味を弱める言葉の為、”meno***f***”は「今までより弱く」”meno***p***”は「今までより強く」となります。

- **接尾辞**

| 意味を強める | | 意味を弱める | |
|---|---|---|---|
| -ssimo | 極めて～に | -etto | やや～に |
| | | -ino | |

- **速度の局所的な変化**

| | | |
|---|---|---|
| 遅くする | | |
| 直ちに遅くする | ritenuto(=riten.)<br>meno mosso | リテヌート<br>メノ・モッソ |
| 次第に遅くする | ritardando(=rit.,ritard.)<br>rallentando(=rall.) | リタルダンド<br>ラレンタンド |
| 次第に遅くするとともに、音量を弱めていく | calando<br>morendo<br>perdendosi<br>smorzando | カランド<br>モレンド<br>ペルデンドシ<br>スモルツァンド |
| 次第に遅くするとともに、音量を強めていく | allargando(=allarg.)<br>largando<br>slargando | アラルガンド<br>ラルガンド<br>ズラルガンド |
| 速くする | | |
| 直ちに速くする | piu mosso<br>piu tosto | ピウ・モッソ<br>ピウ・トスト |
| 次第に速くする | accelerando(=accel.)<br>stringendo(=string.) | アッチェレランド<br>ストリンジェンド |
| その他 | | |
| 変更前の速さに戻す | a tempo | ア・テンポ |
| 正確な速度で | in tempo | イン・テンポ |

## 2. 強弱記号

### ● 強弱を表す基本的な記号

| | | | |
|---|---|---|---|
| *ppp* | pianississimo | ピアニッシシモ | 出来る限り弱く |
| *pp* | pianissimo | ピアニッシモ | 極めて弱く |
| *p* | piano | ピアノ | 弱く |
| *mp* | mezzo piano | メゾ・ピアノ | やや弱く |
| *mf* | mezzo forte | メゾ・フォルテ | やや強く |
| *f* | forte | フォルテ | 強く |
| *ff* | fortissimo | フォルティッシモ | 極めて強く |
| *fff* | fortississimo | フォルティッシシモ | 出来る限り強く |

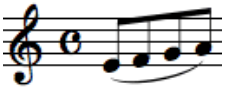
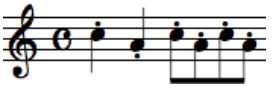
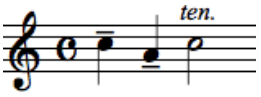
### ● 強さの変化

| | | | |
|---|---|---|---|
| 徐々に変化させる | | | |
| *cresc.* | crescendo | クレシェンド | だんだん強く |
| *decresc.* | decrescendo | デクレシェンド | だんだん弱く |
| *dim.* | diminuendo | ディミヌエンド | |
| 急激に変化させる | | | |
| rf<br>rin*f*<br>rin*fz* | rinforzando<br>rinforzato | リンフォルツァンド<br>リンフォルツァート | 急激に強くする<br>（極めて短時間のcrescendo） |
| 突然強さを変える | | | |
| *fp* | forte piano | フォルテ・ピアノ | 強く奏した直後に弱くする |
| subito *f* (=sub.*f*) | subito forte | スービト・フォルテ | 直ちに強く |
| subito *p* (sub.*p*) | subito piano | スービト・ピアノ | 直ちに弱く |

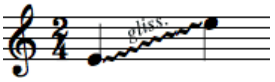
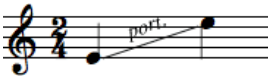
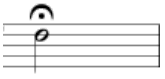
| 特定の音を強調する | | | |
|---|---|---|---|
| ＞<br>^ | accento | アクセント | 記号がつけられた音だけを特に強く奏する |
| *fz* | forzato | フォルツァート | |
| *sf* | sforzando | スフォルツァンド | |
| *sfz* | sforzato | スフォルツァート | |
| *rf* | rinforzando | リンフォルツァンド | |
| rin*f* | rinforzato | リンフォルツァート | |
| rin*fz* | | | |

- **アーティキュレーション記号**

演奏上の性格や表現のあり方を「アーティキュレーション」と呼びます。特定のアーティキュレーションを指定するためには、音符の上または下に特別な記号か語句を書き添えます。

| | | | |
|---|---|---|---|
| legato | レガート<br>※記号：スラー | 各音を滑らかにつなげる |  |
| sutaccato(=stacc.) | スタッカート | 各音を短く切る |  |
| tenuto(=ten.) | テヌート | 音を十分長く持続させる |  |
| marcato(=marc.) | マルカート | 一音一音をはっきりと強調する | |

- **演奏上の指示**

| | | | |
|---|---|---|---|
| glissando<br>(=gliss.) | グリッサンド | 2音間をつなげて滑らせる |  |
| portamento<br>(=port.) | ポルタメント | |  |
| fermata | フェルマータ | 適宜延ばす |  |

| | | |
|---|---|---|
| ∨ | ブレス | 息継ぎ記号 |
| ’ | カンマ、コンマ | |
| mezza voce | メッザ・ヴォーチェ | 半分の声で、抑えて |
| messa di voce | メッサ・ディ・ヴォーチェ | 長めの音符を、前半は次第に強く後半は次第に弱く |
| B.F. | ブシュ フェルメ［仏］ | 口を閉じたハミング |
| B.O. | ブシュ ウヴェルト［仏］ | 口を開けたハミング |
| unison(=unis.) | ユニゾン［英］ | 複数パートで同一の旋律を歌う |
| divisi(=div.) | ディヴィジ | 一声部が複数声部に分かれる |
| tutti | トゥッティ | 全員による総奏 |
| solo | ソロ | 単独で |

## 3. 発想標語

「発想標語」とは、楽曲の性格や表情を示すための標語です。伝統的にイタリア語が広く用いられてきましたが、近代ではその他の各国語もそれと並んで用いられます。こちらでは頻繁に用いられる基本的な標語を、種類別にご紹介します。

| | | |
|---|---|---|
| 静粛 | | |
| *calmando,calmato* | カルマンド、カルマート | 静かに |
| *gentile* | ジェンティーレ | 穏やかに、優しく |
| *misterioso* | ミステリオーソ | 神秘的に |
| *placido* | プラーチド | 穏やかに、落ち着いて |
| *quieto* | クイエート | 静かに、穏やかに |
| *sotto voce* | ソット・ヴォーチェ | 声を潜めて |
| *tranquillo* | トランクィッロ | 静かに、平静に |
| 重厚 | | |
| *grave* | グラーヴェ | 荘重に、重々しく |
| *pesante* | ペサンテ | 重々しく、鈍重に |
| *pietoso* | ピエトーソ | 敬虔に、憐れみ深く |
| *religioso* | レリジオーソ | 宗教的に |
| *serioso* | セリオーソ | 真面目に、厳粛に |
| *sostenuto,sostenendo (=sosten.,sost.)* | ソステヌート、ソステネンド | 音の長さを十分に保って、引きずるように |
| 悲哀 | | |
| *con dolore* | コン・ドローレ | 痛ましく |
| *disperato* | ディスペラート | 絶望して |
| *dolente* | ドレンテ | 悲しげに |
| *doloroso* | ドロローソ | 痛ましく |
| *elegiaco* | エレジーアコ | 悲歌風に |

| | | |
|---|---|---|
| *flebile* | フレービレ | 嘆くように |
| *lacrimoso(=lagrimoso)* | ラクリモーソ | 涙ぐんで、嘆くように |
| *lamentabile,lamentoso* | ラメンタービレ、ラメントーソ | 悲しげに、嘆くように |
| *malinconico* | マリンコーニコ | 憂鬱に |
| *mesto* | メスト | 悲しげに、嘆くように |
| *patetico* | パテーティコ | 悲壮に |
| 優美 | | |
| *amabile* | アマービレ | 愛らしく |
| *amoroso* | アモローソ | 愛情豊かに |
| *con dolcezza* | コン・ドルチェッツァ | 甘美に |
| *con grazia* | コン・グラツィア | 優美に |
| *con gusto* | コン・グスト | 良い趣味をもって、味わいをもって |
| *delicatamente,delicate* | デリカタメンテ、デリケート | 繊細に |
| *dolce* | ドルチェ | 甘美に、柔らかく、愛らしく |
| *elegante* | エレガンテ | 優雅に |
| *grazioso* | グラツィオーソ | 優美に |
| *leggiadro* | レッジャードロ | 優雅に |
| *nobilmente* | ノービルメンテ | 高貴に、上品に |
| *soave* | ソアーヴェ | 甘美に、柔和に、優美に |
| *teneramente* | テネラメンテ | 優しく |
| 表情 | | |
| *affettuoso* | アフェットゥオーソ | 情趣豊かに、優しさを込めて |
| *cantabile* | カンタービレ | 歌うように |
| *con espressione (=espressivo)* | コン・エスプレッシオーネ | 表情豊かに |

| | | |
|---|---|---|
| *con sentimento* | コン・センティメント | 感情豊かに |
| *espressivo(=espr.)* | エスプレッシーヴォ | 表情豊かに |
| *lusingando* | ルジンガンド | 媚びへつらうように |
| *mormorando* | モルモランド | 呟くように、囁くように |
| *parlando,parlante,parlato* | パルランド、パルランテ、パルラート | 話すように、語るように |
| *sospirando* | ソスピランド | 溜め息をつくように |
| *vacillando* | ヴァチランド | 躊躇うように、不安定に |
| 素朴 | | |
| *pastorale* | パストラーレ | 牧歌風に、田園風に |
| *rusticana,rustico* | ルスティカーナ、ルスティコ | 田舎風に |
| *semplice* | センプリチェ | 単純に、素朴に |
| 陽気 | | |
| *giocoso* | ジョコーソ | おどけて、ユーモラスに |
| *gioioso* | ジョイオーソ | 喜ばしく、陽気に |
| *scherzando* | スケルツァンド | 戯れるように |
| 快適 | | |
| *comodo* | コーモド | 気楽に、快適なテンポで |
| *piacevole* | ピアチェーヴォレ | 愉快に、心地良く |
| 自由 | | |
| *ad libitum*［羅］ | アド・リブ | 随意に |
| *a piacere* | ア・ピアチェーレ | 随意に |
| *capriccioso* | カプリッチョーソ | 気ままに |
| 華麗 | | |
| *bravura* | ブラヴーラ | 奔放に、華麗に |
| *brillante* | ブリッランテ | 輝かしく、華やかに |

| | | |
|---|---|---|
| 壮大 | | |
| *grandioso* | グランディオーソ | 堂々と、壮大に |
| *maestoso* | マエストーソ | 堂々と、威厳をもって |
| *pomposo* | ポンポーソ | 堂々と、壮麗に |
| 活発 | | |
| *animato* | アニマート | 活気づいて |
| *con anima* | コン・アニマ | 生気をもって |
| *con brio* | コン・ブリオ | 活気をもって |
| *con moto* | コン・モート | 動きをもって、速く |
| *con spirito* | コン・スピリート | 活気をもって |
| *mosso* | モッソ | 動いて、活発に、速く |
| *spiritoso* | スピリトーソ | 活気をもって |
| *vivace* | ヴィヴァーチェ | 活発に、速く |
| *vivo* | ヴィーヴォ | 生き生きと |
| 軽快 | | |
| *con leggierezza (=leggerezza)* | コン・レジェレッツァ | 軽快・優美に |
| *leggiero(=leggero), leggieramente* | レッジェーロ、レジェラメンテ | 軽快かつ優美に |
| 急速 | | |
| *rapido,rapidamente* | ラピド、ラピダメンテ | 素早く、急いで |
| *veloce* | ヴェローチェ | 素早く、敏速に |
| *volante* | ヴォランテ | 飛ぶように、急速に |
| 強力 | | |
| *con energia* | コン・エネルジーア | 精力的に |
| *deciso* | デチーソ | 決然と |
| *energico* | エネルジコ | 精力的に |

| | | |
|---|---|---|
| *marziale* | マルツィアーレ | 雄々しく、勇壮に |
| *risoluto* | リソルート | 決然と |
| *vigoroso* | ヴィゴローソ | 力強く |
| 激烈 | | |
| *agitato* | アジタート | 興奮して |
| *appassionato* | アパッショナート | 激情的に |
| *con calore* | コン・カローレ | 熱っぽく |
| *con fuoco* | コン・フォーコ | 火のように、情熱的に |
| *con passione* | コン・パッシオーネ | 情熱的に |
| *feroce* | フェローチェ | 荒々しく、獰猛に |
| *impetuoso* | インペトゥオーソ | 激しく、激情的に |
| *passionato(=appassionato)* | パッショナート | 情熱をはらんで |
| 特定の様式 | | |
| *alla marcia* | アッラ・マルチャ | 行進曲風に |
| *alla polacca* | アッラ・ポラッカ | ポーランド風に |
| *alla turca* | アッラ・トゥルカ | トルコ風に |
| *alla zingarese(=alla zingara)* | アッラ・ツィンガレーゼ | ロマ（ジプシー）風に |

＜参考文献＞
・「楽典　音楽の基礎から和声へ」2019年　株式会社アルテスパブリッシング
監修・著者：小鍛冶邦隆　著者：大角欣矢、照屋正樹、林達也、平川加恵
・音楽用語　音楽用語集　音楽用語辞典　https://ongakuyougo.conceptmol.com/
・音楽用語wiki　http://www.ongaku-yougowiki.com/index.php?FrontPage
・楽典.com　https://xn--i6q789c.com/gakuten/index.html
・SENZOKU ONLINE SCHOOL OF MUSIC　楽典解説
https://www.senzoku-online.jp/theory/classic/index.html

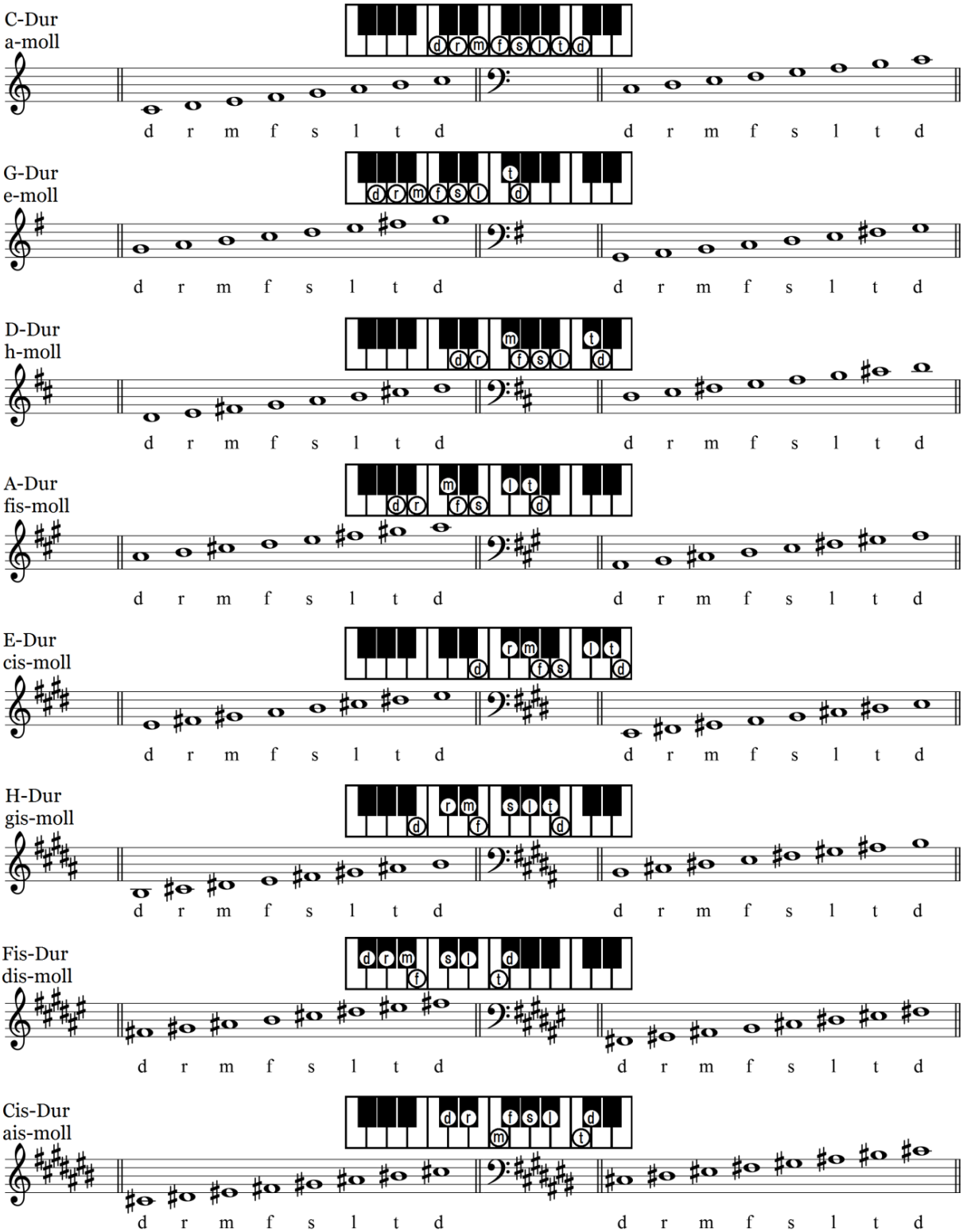
～メモ～

ラストはこれからもっとも使うことになるであろう

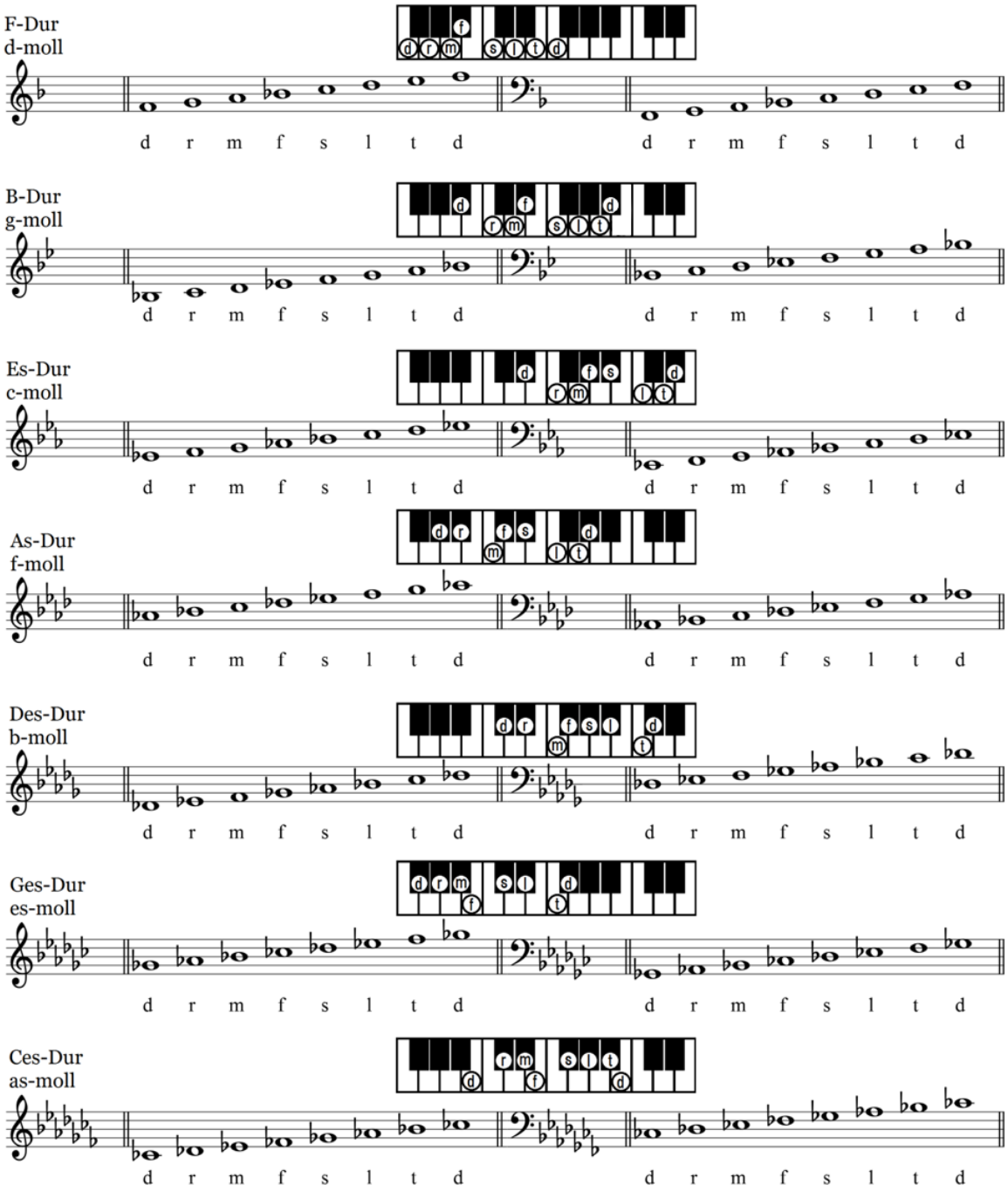
**「調の早見表」**です！

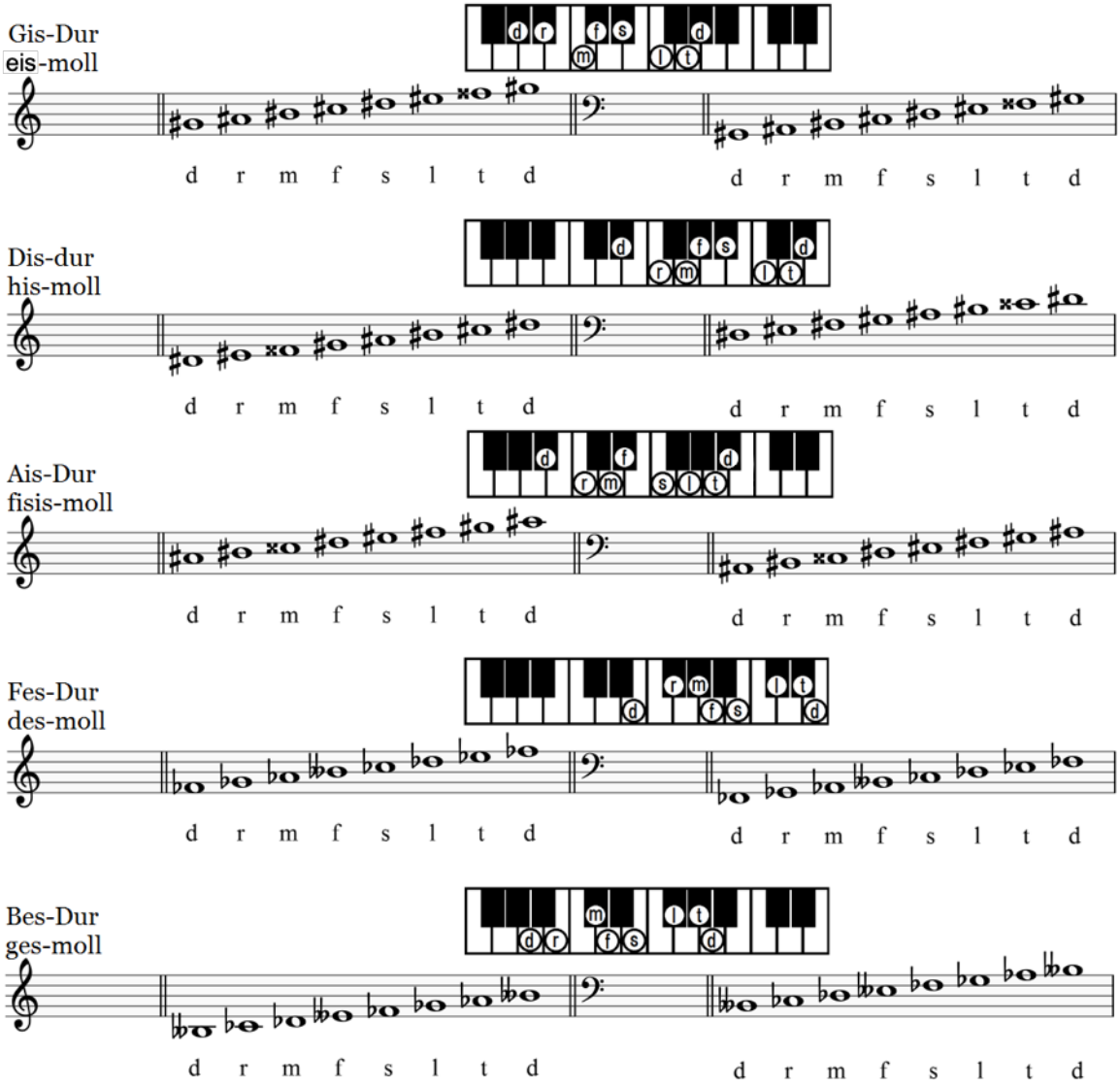
鍵盤の図もついているので対応させて見ましょう。

# 調の早見表　1. シャープ系



# 2. フラット系


F-Dur
d-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
B-Dur
g-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
Es-Dur
c-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
As-Dur
f-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
Des-Dur
b-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
Ges-Dur
es-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d
Ces-Dur
as-moll
d r m f s l t d
d r m f s l t d

# 3. 部分転調系

調号で表されるのは前ページまでで全部ですが、曲の途中に、これだけでは表せない調がまれに出てくることがあります。移動ドでそういった調が示された場合はこちらも参考にしてみてください。